

第1巻において「道」が用いられる場面

おやさと研究所助教
澤井 治郎 Jiro Sawai

諸井慶徳「たんのうの教理」(『諸井慶徳著作集』第3巻、道友社、1965年)では、「たんのう」の意味を「おさしづ」によって解明するにあたり、その手順として、明治20～25年頃の「おさしづ」を「原本的に参考になる」ものとしてとりあげて、それらがどういう場面に対してのものか、どういう一連の言葉で言われるか、他の言葉に言い換えられるか、言い換えられないならばどういう点か、どのような言葉・意味の構造を有するか、その言葉の雰囲気はどのようなものかについて順に論じている。

この連載の目指すところは、「道」という言葉が使われる意味を「おさしづ」によって理解したいというものである。したがって、ここで諸井氏の手順にしたがって、まず『おさしづ〈改修版〉』第1巻(明治20～23年)において、「道」という言葉がどのような場面で用いられているのかを確認しておきたい。

「おさしづ」第1巻の件数と分類

『おさしづ〈改修版〉』には、約2万余の「おさしづ」が収録されている。深谷忠政編『教理研究事情さとし』(道友社、1974年)には、「おさしづ」の分類が次のように記されている。

(1) 教祖御話	3
(2) 御論	16
(3) 御話	29
(4) 刻限	82
(5) 刻限御話	107
(6) 本部事情	493
(7) 教長及び家族	108
(8) 本席及び家族	367
(9) 教会事情	15,360
(10) 個人	3,589
計	20,154 (鹿野昭代調べ)

「おさしづ」の全体を分類すれば上のようになるというのである。これを参考にして、今回は第1巻の用例を分類してみた。第1巻には1,108件の「おさしづ」が収録されている。前々回に、教祖御在世中の「おさしづ」を取り上げたので、今回はその時期の7件を省き、1,101件を第1巻の件数として議論を進めることにする。「教祖御話」はその7件のうちに含まれている。ただし、上記分類の「御論」「御話」「刻限」「刻限御話」は、大まかには一つにまとめて差し支えないと考え、一括して「刻限」として数えている。また、個人については、割書きや本文によって身上に関する伺いであることが分かる場合には「個人身上」、そうでない場合は「個人事情」に分けている。なお、おさづけさしづについては、身上伺いをきっかけとするものが多いが、単純な身上伺いとも言えないため、ここではすべて「個人事情」に入れている(カッコ内は全1,101件中の割合)。

刻限 96 (8.72%) / 本部事情 105 (9.54%) / 教長及び家族 22 (2.00%) / 本席及び家族 87 (7.90%) / 教会事情 117 (10.63%) / 個人身上 453 (41.14%) / 個人事情 221 (20.07%) / 計 1,101

このようにして見ると、第1巻には個人の身上に関する伺いが群を抜いて多く、次に多い個人の事情に関する伺いと合わせ

ると、約6割が個人による伺いの「おさしづ」であることが分かる。

第1巻における「道」の「おさしづ」の件数と分類

そうした「おさしづ」第1巻のうちで「道」という言葉が含まれるものは502件ある(ただし、「道中」や「道理」などのように「どう」と読むものや人名に含まれているものは除く)。したがって、おおよそ半数、5割の「おさしづ」において「道」が用いられている。さらに、その特徴を調べるために、3回以上「道」が出てくる「おさしづ」を数えると241件あり、これは全体の約2割にあたる。この3回以上「道」が出てくる「おさしづ」を、先ほどと同様の仕方で分類すると、次のようになる(カッコ内は全241件中の割合)。

刻限 38 (15.77%) / 本部事情 34 (14.11%) / 教長及び家族 6 (2.49%) / 本席及び家族 29 (12.03%) / 教会事情 18 (7.47%) / 個人身上 95 (39.42%) / 個人事情 21 (8.71%) / 計 241

単純に件数として最も多いのは、「個人身上」で約4割を占めており、それに「刻限」、「本部事情」、「本席及び家族」が続いている。「おさしづ」第1巻の全体でも、「個人身上」が最も多いが、それに続いて多いのが「個人事情」、「教会事情」、「本部事情」となっており、第1巻における「おさしづ」全体と「道」の「おさしづ」とでは、件数の順番が異なっていることが分かる。そのため、単純な件数ではなく、それぞれの分類項目において、「道」が3回以上出てくる「おさしづ」はどの程度の割合であるかを示すと以下のようなになる。

刻限 38/96 (39.58%) / 本部事情 34/105 (32.69%) / 教長及び家族 6/22 (27.27%) / 本席及び家族 29/87 (33.33%) / 教会事情 18/117 (15.38%) / 個人身上 95/453 (20.97%) / 個人事情 21/221 (9.50%)

単純な件数としては「個人身上」が95件で最も多いものの、分母が453件と大きいので、個人の身上に関する伺いの「おさしづ」において、「道」が3件以上出てくるのは約2割でその割合は相対的に低くなる。第1巻において「道」という言葉が3回以上出てくるのは約2割であるから、「個人身上」において「道」が出てくる割合は、第1巻の全体的な割合とほとんど同じであるということが出来る。また、全体における件数で比較的多かった「個人事情」と「教会事情」には「道」の「おさしづ」の件数が少ないため、割合はかなり低くなっている。

件数として「個人身上」に続いて多かった「刻限」「本部事情」「本席及び家族」の項目は、それぞれ分母自体が100前後とそれほど大きくないため、各項目における「道」の「おさしづ」の割合は相対的に高くなっている。

これらの分類項目を場面と言い換えれば、上にあげた数値は、それぞれの場面で「道」という言葉がどのような頻度で出てくるのかを表していると言える。したがって、このように件数を整理してみると、「刻限」「本部事情」「本席及び家族」といった場面において、「道」という言葉が頻繁に用いられているということが分かる。